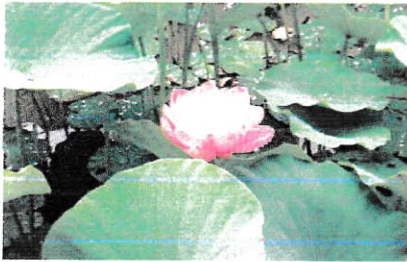


五郎沼古代ハスが見頃 樋爪館懇話会案内所設置

今年は昨年より2日遅い7月3日の開花始まりでした。遺跡案内人部会ではハス池のハス池の近くに案内所を設けて、ハスや樋爪館に関する案内を連休の3日間予定していたが、雨のための最終日のみ実施し、当日は約180人が観賞に訪れた。

ハスの花は朝早くに咲いて午後には萎むという特性があり、観賞のタイミングとしては午前中の早い時間帯がベストである。また、3日間咲いたり萎んだりを繰り返すが、4日目には萎まず、花びらの色もあせた状態で枯れ進み見栄えもよく、開花2日目が最も美しく観賞するポイントであり、8月半ば頃まで最盛期より開花がは少ないが、その花姿を楽しむことができる。

五郎沼古代ハス(中尊寺ハス)は、葉の表面に触ってみると中心部より半分くらいまでツルツル。辺縁部の半分はザラザラしているこれが葉の特徴である。



開花2日目の五郎沼古代ハス(7/9)



ハスの観賞に訪れた着物姿の女性4人(7/17)



古代ハス 葉の表面

《《《8月～9月行事予定のお知らせ》》》

<p>8月16日 (水曜日)</p>	<p>第142回 月例発表会</p>	<p>時間：午後7時～9時 場所：赤石公民館 和室 テーマ「陸奥話記(むつわき)を読む」 発表者 宇部 真澄 テーマ「日本の仏教⑱ 臨済宗(3) ↓ 発表者 宮 良男 京都五山・盛岡五山</p>
<p>9月20日 (水曜日)</p>	<p>第143回 月例発表会</p>	<p>時間：午後7時～9時 場所：赤石公民館 和室 テーマ「陸奥話記(むつわき)を読む ②」 発表者 宇部 真澄 テーマ「日本の仏教⑳ 曹洞宗(1)永平寺と道元」 発表者 宮 良男</p>

「紫波の歴史かるた」プレ大会 8.27 オガールで開催

地域の風景・歴史・伝統文化を詠んだ「歴史かるた」を通して、ふるさとの魅力や価値を、これから紫波町を担っていく児童・生徒に伝え、地域に対する関心や愛着を高めことを趣旨とする。

- ・とき 令和5年8月27日(日) 午後1時～2時30分
- ・ところ 紫波町情報交流館 芝生広場 (雨天：交流館の中)
- ・主催 紫波の歴史かるた大会実行委員会 会長 佐藤観悦
- ・協働研究 岩手県立大学総合政策学部、紫波総合高等学校
- ・参加資格 小学生以下の部、中学生の部 [参加料なし]
- ・参加申込 開催当日受付 先着順 各部20名



歴史かるたプレ大会チラシ

令和5年7月19日に開催した第141回月例発表会において、発表者が用いました資料等から一部分を抜粋して掲載しましたのでご了承願います。

大沢斗志子の講談「須川長之助とマキシモビッチ博士」

時は万延元年、明治維新より遡ること8年。瞳明るく、日焼けした肌に精悍な体つき一人の若者が開港間もない函館を目指し、津軽海峡を越えた。その青年が言わずと知れた我らが須川長之助その人である。

その函館で働きながら異国の文化に興味を持った長之助は、正教会に出入りし、神父を介してシモノビッチ博士に雇われ、そして植物採集の助手となった。博士は親しみを込めてロシア風にチョウノスキーと呼ぶようになり、植物採集の方法を教えた。

長之助の働きによって博士は「東南アジア植物分類学の父」として植物学史に金字塔を打ち立てるが、博士の方でも長之助に感謝する気持ち並々ならぬものがあった。

博士は「チョウノスキーがいなければ日本の植物研究は何十年も遅れていただろう。彼は学問こそないが、植物の採集家としては世界に通用する知識と技術をもっている。そうだ、チョウノスキーの学名に捧げて世界にその名知らせよう。」と言った

「学名」といというのは、新種を報告する際、世界中どこでも同じ呼び方をするよう国際的なルールに従って付けられる名前である。例えば、紫波町の東根山に咲いているシロバナエンレイソウは、学名ではトリリウム・チョウノスキー・マキシモとなる。

チョウノスケソウの学名はドリアス・オクトペテラ。これにはチョウノスキーな名が付いていない。博士は、これにもチョウノスキーの名を付けようとしたが、果たせぬうちに病の床に伏し、帰らぬ人となってしまった。

これを伝え聞いた日本の植物学の父、牧野富太郎博士によって、長之助が世界で初めて発見した花に日本語で捧げられた名前がチョウノスケソウである。

金濱興一の「北方の民 1」5月例月発表の続き

《阿倍比羅夫(あべのひらふ)の北征の意義》

北海道大学大学院 教授 菊池俊彦の講演記録より

太平洋に多賀城が置かれるのは神亀元年(724)である。阿倍比羅夫が遠征したにもかかわらず、その後全く「国境」線は北に延びていない。阿倍比羅夫の遠征は、このときに行われただけで遠征らしいものは行われていない。

多賀城が修復された天平宝字6年(762年)建立の碑文には「多賀城は蝦夷の国の境界を去ること百二十里」とあり、多賀城の北78kmに「国境」があると記されている。8世紀後半になっても、まだ、律令国家の北の「国境」はせいぜい現在の岩手県くらいまでしかいっていない阿倍比羅夫は何のために遠征して何の成果があったのだろうか、ということが問題となる。

7世紀中ごろに、朝鮮半島東南部の新羅(しらぎ)の北には高句麗(こうくり)がある。高句麗は日本へ使節を18回も送り込み、日本と非常に密接な関係があった。

7世紀後半になると日本と新羅の関係が悪化してきたが、その中で日本は高句麗と外交関係を強化し、同盟を結んで新羅を牽制しようとしたのではないかと思う。

新羅の沿岸を航海して高句麗に接近するわけにはいかなかったため、北回りで行って高句麗への航海ルートを探すための偵察が、阿倍比羅夫の目的だったのではないだろうかと思う。

高句麗の東に肅慎(しゅくしん)国があるが、日本ではこれを「みしはせ」と呼んでいる。阿倍比羅夫の遠征記録に肅慎(みしはせ)が出てくるのも、肅慎、高句麗への接近を諮ろうとした航海だったからではないかと思う。

[まとめ] 阿倍比羅夫は何のために北方へ遠征したのか。新羅を意識して肅慎、高句麗への接近を図ろうとした航海だったのではないのか。